

### 【第1回策定懇談会における質問事項（参考資料1の補足資料）】

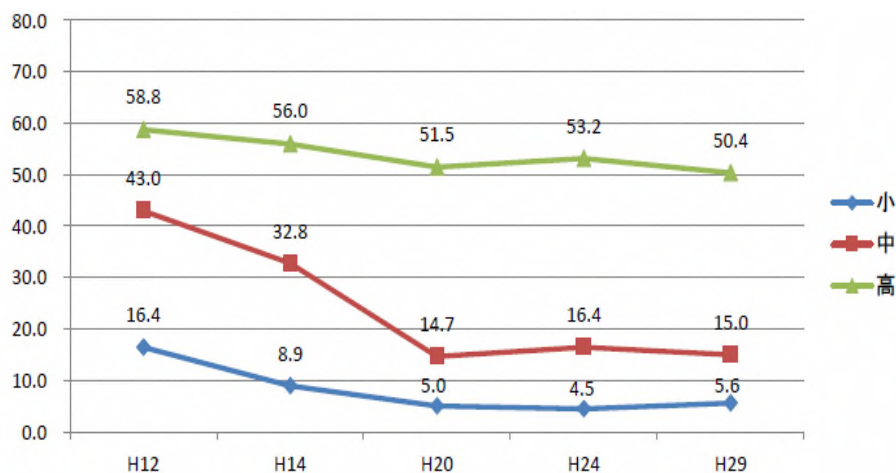
7/23に開催された第1回懇談会の委員発言の中で「第四次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」における3つの方向性の1つとして『①中学生までの読書習慣の形成が不十分なことから、発達段階に応じた効果的な取り組みを推進する。』とあるが、「中学生までの読書習慣の形成が不十分であるという論拠」と「読書習慣がついているという具体的な数字のラインがあるか」についての質問があった。

（回 答）

国が策定した「第四次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」や、同計画策定のための「子供の読書活動推進計画に関する調査研究」においては、読書習慣の形成が不十分という「論拠」や「基準」は示されていない。

しかしながら、平成12年度小学生の不読率16.4%、中学生43.0%、高校生58.8%であったのに対し、平成29年度の不読率は小学生5.6%、中学生15.0%、高校生50.4%と中長期的に改善傾向にあるが、一方で、高校生の不読率は依然として高く、いずれの世代においても、平成34年度の不読率目標を小学生2%以下、中学生8%以下、高校生26%以下とする進捗での改善は図られていない。

【参考】不読率の推移



資料：学校読書調査

また、高校生の不読率が高いことを受けて行った文部科学省の調査研究によると、読書を行っていない高校生は、中学生までに読書習慣が形成されていない者と、高校生になって読書の関心度合いが低くなり本から遠ざかっている者に大別される。

このような現状を改善するため、中学生までに読書習慣が形成されていない者には、発達段階に応じて読書し読書を好きになる、つまり読書習慣の形成を一層効果的に図る必要があり、子供が発達段階に応じて読書習慣を身に付けることができるよう、乳幼児期からの読書活動が重要であることを踏まえつつ、発達段階ごとの特徴を考慮した効果的な取組を実施することが重要であると示されている。